

⑩ 竜胆瀉肝湯が難治性慢性前立腺炎症状に奏功した一例

神戸大学医学部附属病院 腎泌尿器科分野

梁 英敏、重村 克巳、中野 雄造、藤沢 正人

症例は25歳男性。現在潰瘍性大腸炎にてラモセトロン+ビオフェルミンにて治療中。尿道分泌物、精液が自然に出てくる、排尿時痛、頻尿などを主訴に近医受診し、尿道炎として抗菌薬での治療を受けるも改善せず、さらに微生物学的な検査にても陽性所見は無し。難治性尿道炎にて当科紹介となった。検尿所見は正常であり、MRI検査にて慢性前立腺炎と診断され、キノロン系、マクロライド系などの抗菌薬、猪苓湯、桂枝茯苓丸、抗炎症剤などを処方をするも改善せず。慢性疲労を訴えたため、補中益気湯を処方するも上記主訴は改善せず、疼痛も増強してきたため現行の治療は不適と判断し、竜胆瀉肝湯に切り替えた。4週間後以降から、精液が自然に出てくるようになり、排尿時痛は改善傾向を認めた。その後竜胆瀉肝湯の内服にて症状はコントロールできている。

竜胆瀉肝湯は、『排尿痛、残尿感、尿の濁り、帶下』の効能効果を有し、使用目標として、比較的体力のある人で泌尿器、生殖器等の炎症に伴って排尿痛、頻尿、帶下などのある場合に用いるとされている。

慢性前立腺炎を始めとした慢性尿路疾患は一般的に難治性であり、西洋医学の観点では治療に難渋する場面が多く、本邦では尿路不定愁訴に対し経験的な処方として漢方薬が処方される場面は元来多かったが、今後難治性の慢性尿路感染症による尿路不定愁訴に対する関心はますます高くなってくると考えられており、それに伴い竜胆瀉肝湯等漢方薬への注目もますます高まつくるものと考えられる。泌尿器科医は漢方に対する関心は比較的高いもののその大半が実証・虚証の判定もせずに対症療法的に処方されており、患者様ひとりひとりの状況に応じて適切な処方を行えるように啓蒙していく必要がある